

「ザイオン・イズ・ライジング」 紹介文」

岡和田晃

第2期『エクリップス・フェイズ』シェアードワールド小説企画の第6弾は、伊野隆之の新作「ザイオン・イズ・ライジング」だ。

これは第1期に掲載され、好評を博した連載「ザイオン・イン・アン・オクトモーフ」(<http://prologuenewave.com/archives/2029>)の、直接の続編である。ふとしたことか、タコ型義体オクトモーフを着用する羽目に陥ってしまったザイオンと、彼にタカる知性化ガラス・インドラルの凸凹コンビの珍道中は、今回も健全である。

伊野隆之と言えば、眉村卓言うところの「インサイダーSF」——組織とその内部で生きる者に焦点を当てたSF作品の紛れもない傑作である——『樹環惑星——ダイビング・オパリアー』（徳間書店）で名高いが、この「ザイオン」シリーズでは、インサイダーSFの伝統を的確に押さえた組織に生きる悲哀と、人間観を奥の奥まで見据えた、モンテイ・パイソンにも通じるユーモア・センスが絶妙に利いた“おもろうて、やがてかなしき”、大人のための、どこか懐かしいSF世界が提示されているのである。

例えば宮内悠介の「スペース金融道」シリーズと読み比べてみれば、伊野隆之が何を狙っているのかが、いつそう克明に見えてくるのではなからうか。

「ザイオン・イン・アン・オクトモーフ」の好評に伴い、「ザイオン・イズ・ライジング」も2回に分けた形で提示させていただく。とりわけ、今回掲載部の後半から、次回掲載予定に連なる箇所では、魂と義体（エゴ・モーフ）を乗り換えられる、『エクリップス・フェイズ』ならではの仕掛けが絶妙に効いており、ポストヒューマンSFとしての可能性も垣間見せてくれる。なんと引き出しの多い書き手だろうか。

そして知性化種。『エクリップス・フェイズ』は、知性化種について重点的に解説した『Panopticon』という追加設定資料集があるくらい、重要な設定である。コードウェイナー・スミスの「人類補完機構」シリーズが、二級市民として知性化種を描き、その哀しみを行間に漂わせていたのだとすれば、伊野隆之の「ザイオン」シリーズは、知性化種と人間の内面の落差を、透徹した眼差し、距離をとったユーモアで描き出す。この作品を語る批評的言語は、いまだ成熟していないのではなからうか。いささか奇妙な例えに思われるかもしれないが、現代版『東海道中膝栗毛』ともいべきおかしみに満ちた作品ではないかと考える。

ともあれ、批評家泣かせのこの作品、読めば読むほど味が出てくるのは間違いない。他言は無用。存分に、熟成されたユーモアと政治のブレンドの妙味をご堪能されたい。